



土木紀行

耶馬溪橋

大分県中津市本耶馬溪町

日本には、約1,600基の石橋が残っているとされています。そのうちの95%は九州にあり、中でも大分県には日本最多で500基弱が現存しています。

大正12年に架設された耶馬溪橋は、石橋としては日本最大となる橋長116mをもつ8連アーチです。耶馬溪橋は、菊池寛の小説「恩讐の彼方に」の舞台となった青の洞門の下流500mの山国川に位置し、別名オランダ橋と呼ばれています。また、上流約5.3kmの馬溪橋、同約1.3kmの羅漢寺橋と合わせて「耶馬三橋」と呼ばれており、県の有形文化財に指定されています。

耶馬溪橋は、陸軍の工兵中尉・永松昇県技師が大分県中津土木管区事務所に勤務中に設計・監督したも

ので、請負が岩淵万吉、石工が松田新之助（院内町出身）らによって建造されました。施工費は当時の金額で4万円程度だったそうです。

橋の完成までは、青の洞門がある樋田地区と山国川対岸の曾木地区とを結ぶ交通手段は渡し船、もしくは遠回りして堤防を歩くしかありませんでした。「大雨で川が流れたら、対岸には渡れない。親の死に目に会えないから、曾木には嫁をやるな」という言い伝えも残っています。

耶馬溪橋の架設から、今年でちょうど80年。建築資材の主流も石から鉄筋コンクリートへと移り、石工の数も激減しています。しかし、この耶馬溪橋が見せる、当時の石工の技術力と長方形の石を積み上げた力強い威厳に満ちた美しさは、い



つまでも後世に受け継がれていくことでしょう。

耶馬三橋

耶馬溪橋，その上流約1.3kmに位置する羅漢寺橋，同5.3kmの馬溪橋と合わせて「耶馬三橋」と呼ばれる，大分県の有形文化財です。

山国川の対岸に位置する，青の洞門がある樋田地区と曾木地区とを結ぶ交通手段は，船を使うか遠回りして堤防を歩くしかありませんでした。おかげで「大雨で川が流れたら，対岸には渡れない。親の死に目に会えないから，曾木には嫁をやるな」とまで言われたエピソードが今も残っています。

耶馬溪の誕生

その昔，九州は南北二つの島にわかれ，別府湾は有明海に抜けて，耶馬溪辺りは海底であったと言われています。人類誕生以前の数百年前に最初の大爆発があり，英彦山から犬ヶ岳，檜原山にか

けての福岡県境の山ができ九州が一つにつながりました。その時の噴火口は檜桶山（津民）で火の桶が檜桶山になったとの伝説があります。その数万年後に次の火山活動があり，山国川の本流がこの時にできたといわれています。さらに数万年後，阿蘇山最後の爆発による阿蘇火山溶岩の襲来にあいました。この時の溶岩は暗黒色で山国川の流れて流れて流れ，山国川を埋めましたが，その後の風雨，河水の侵食作用によってさまざまな景勝風景がつくられています。

耶馬・日田・英彦山国定公園

耶馬溪は大正12年3月7日に「名勝」として国の指定（文化財保護法）を受けています。「耶馬溪」という地名は，1818年この地を訪れた頼山陽が奇岩奇石の渓谷や岩峰の美しさに驚嘆し，山国谷に転じて「耶馬溪」と呼び「耶馬溪に天下に比べるものなし」と絶賛しました。昭和25年7月29日には耶馬溪を含む一帯が耶馬・日田・英彦山国定公園に指定されました。

<p>【交通】</p> <p>・JR 日豊線中津駅よ車で約20分，バスで約35分</p> <p>【探訪コース】</p> <p>豊かな緑と清らかな水の流れ。自然が与えてくれた環境を大切にしている本耶馬溪町。春の桜，秋の紅葉，溪流沿いの温泉と自然が満載です。</p> <p>菊池寛の小説「恩讐の彼方に」</p>	<p>の舞台として一躍有名になったのが「青の洞門」です。現在の洞門は，かなり変化しているものの一部には明かり採り窓やノミの跡が残っています。この道を歩けば，禅海和尚の不屈の精神が偲ばれ，まさに岩をも通す確固たる一念には驚かすにはいられないでしょう。</p> <p>石橋の記念碑，羅漢寺の石造物と石造文化財探訪をはじめ，道の駅「耶馬トピア」でのそば打ち体</p>	<p>験，西谷温泉公園での冷暖房完備のログハウスでの宿泊など見所も一杯です。</p> <p>【特産品】</p> <p>名産のお茶，きゅうり，イチゴ，しいたけ，そばなどの農産物が有名。</p> <p>【問合せ先】</p> <p>大分県中津市商工観光課 電話 0979 22 1111</p>
---	--	--